

EYE

by松尾高司
(KAI project)

『GUIDE』って
いったいなんじゃ？

「これ知ってます？」
東京・町田市のストリングショップ『サウスワールド』のオーナー富樫嘉徳氏は、ニコニコしながら、あるグリップテープが巻かれたサンプルを私の目の前に差し出した。「この感触って、松尾さんがいつも理想だと言っているリプレイスメントグリップのフィーリングじゃないですか！」
おおっ！ たしかに！ まさにそのものじゃないか！
「こっちは簡単に巻き換えられるグリップテープだぞー」とでも言いたげな富樫氏の満足げな顔。
悔しいけれども、初めて見たブランドだし、間違いなくあの感触である。しかし……『GUIDE』ってなんじゃ？

満足できるグリテがない
ラケットメーカーは軽視

70年代のグリップ滑り止めは、粘着剤を塗ったマットに手を押し付けてベトベトさせたり、粉やおがくずに汗を吸わせて手のひらをサラサラさせるものだったが、80年頃からグリップテープが現われ始める。

最初は布や紙メッシュのテープに弱めの粘着剤を塗布したものなどがあつたが、今でも愛用者が多い『トナグリップ』の登場が世界を一変させた。あのドライの感触は、後に登場するウェットタイプを「吸い付くけれど、握り替えにくい」と思わせるほど、サラサラで、素晴らしい。ただし……頻繁に巻き換える必要がある。そこで日本人お得意の「中庸作戦」によるセミウェットタイプが作られ、あれやこれやと30年たつたが、さほどの進化を感じない。

手汗対策など、特徴的なスグレテープを本気で企画してきたのはヨネックスくらいのもので、他のラケットメーカーはまるでグリップの感触に興味がない。自社ブランドのグリップテープもほとんどOEMに任せっぱなし。

実はこの『GUIDE』こそ、グリップテープOEMの世界的大手メーカーである『ハイセター』社の自社ブランド製品だったのだ。

究極のセミウェット これこそオールマイティ！

この『GUIDE』のグリップテープを握った瞬間、「もうこれでグ

これでグリップテープ 探しに終止符！ ガイド『P206』

グリップテープ探検をしなくていい」と直感した。

ドライでもウェットでもない……かといってセミウェットという単語は、従来のセミウェットをイメージさせてしまつから使いたくない。

そう！これは「オールマイティ」なグリップテープと表現すべきだ。ウェットでもない、ドライでもない、両方の良さをバランスよく備えたグリップ&スライド感。握り替えがしにくいからとウェットタイプを苦手にしてきた人も、これなら違和感なく使えるだろう。

正式名称は『エアロ・パーフォレ



GUIDE P206
サイズ◎25mm×110mm×0.6mm(幅×長さ×厚さ)
価格◎3本入り/840円(税込)、1本入り/294円(税込)
問い合わせ先◎株式会社コスモジャパン
<http://www.cosmojpn.co.jp>



ーション」といい、「空気孔」の意味。おそらく表面コーティングのポリウレタンにある無数の微細孔で汗を吸い取りやすくしていることから、このネーミングと推察。
テープ自体がけっこう薄いため、汗が溜まる感じもなく、文句の付けどころが見つからない「究極のグリップテープ」だ。唯一、パッケージがイケてないのだが、中身の性能と握った感触の心地よさは絶対の自信を持って保証する。
イケてないパッケージを店頭で見つけたあなたはラッキーだ。ダメされたと思つて、まず試しに1本！

凸凹などの引っかかりタイプじゃなきゃイヤだ！ という人でなければ、ぜひ試してほしい。まるで上質のセーム皮のような感触。極小エンボスが適度なスライド感を生み出してきて、これまた心地よい。0.6mmと薄いので、グリップの太さにもあまり影響を与えないし、テープ表面にくっつき防止フィルムが貼られていないので、巻く前に剥がす手間がいらずに便利

まつお・たかし◎1960年生まれ。『テニスジャーナル』で26年間、主にテニス道具の記事を担当。試打したラケット2000本以上、試し履したシューズ数百足。おそらく世界で唯一のテニス道具専門のライター&プランナー